

映画『海難1890』公開記念

【特集】

色あせない絆

125年前の悲劇が生んだ串本とトルコの友好

善意が生んだトルコとの強い絆

親日国として知られるトルコ共和国。

アジアとヨーロッパにまたがり、日本からおよそ9000kmも離れた国が親日国となつたきっかけが串本町にあります。

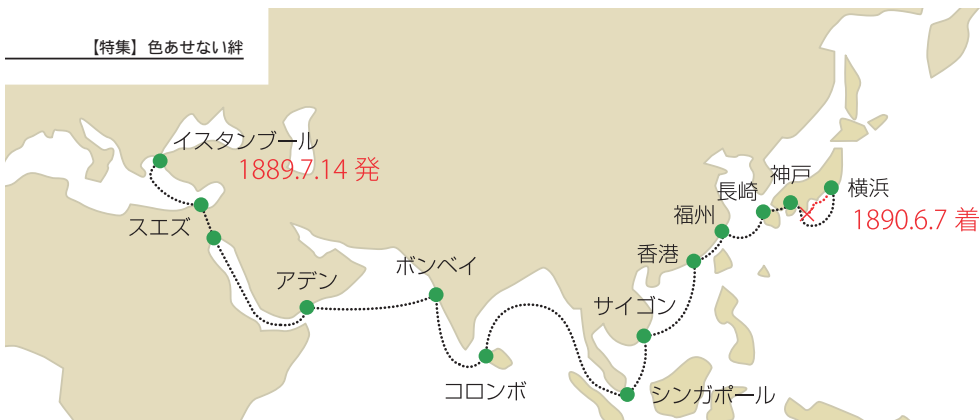
1890年に起きたエルトゥール号の遭難事故の際、紀伊大島の住民が69名の乗組員を救出。

無事祖国まで送られた69名は、この恩を忘れず、子に、そして孫にと、この史実を語り継いでいきました。

それから95年後の1985年には、戦争に巻き込まれた日本人をトルコ共和国が救出。困っている人に手を差し伸べる。私たちの先人が行った善意が時を超えて、多くの日本人を救うことにつながったのです。

2つの史実をもとにした映画も製作され、串本とトルコの友好は、さらに深まります。

エルトゥール号遭難事故当時と変わらず、海を照らす檜野埼灯台の光。



エルトゥールル号航海史

1889年7月14日	イスタンブールを出港
1889年7月～9月	スエズ運河到着 浅瀬に乗り上げ、舵等を損傷
1889年10月	アデンに寄港 ボンベイに寄港
1889年11月	コロンボに寄港
1889年11月 ～1890年3月	シンガポールに寄港 季節風が止んだこと、石炭不足や船の損傷により足止め
1890年3月～6月	サイゴンに寄港 香港に寄港 福州に寄港 長崎に寄港 神戸に寄港
1890年6月7日	横浜に到着



エルトゥールル号の乗組員（幹部）

日本までの長い航海

軍楽隊や多数の海軍兵学校修了生など、650名を超える乗組員を乗せたエルトゥールル号は、1889年7月14日、イスタンブールを出港。途中、各地のイスラム教国に教主国としての威厳を示しながら寄港し、熱烈な歓迎を受け、航海を続けましたが、日本に至るまでは苦難の連続となりました。

出港2週間目、地中海と紅海を結ぶスエズ運河を通過中に船体が浅瀬に乗り上げてしまい、舵と舵軸を損傷。修理のため、約2ヶ月を費やしました。

出港4ヶ月後には、シンガポールに到着。しかし、スエズ運河での予定外の滞在により日程が大幅に遅延したため、本来吹いているはずの季節風が止み、燃料である石炭が枯渇。さらに、長い航海により、船体が大きく損傷し、修理が必要となったため、およそ4ヶ月もの滞在を余儀なくされています。

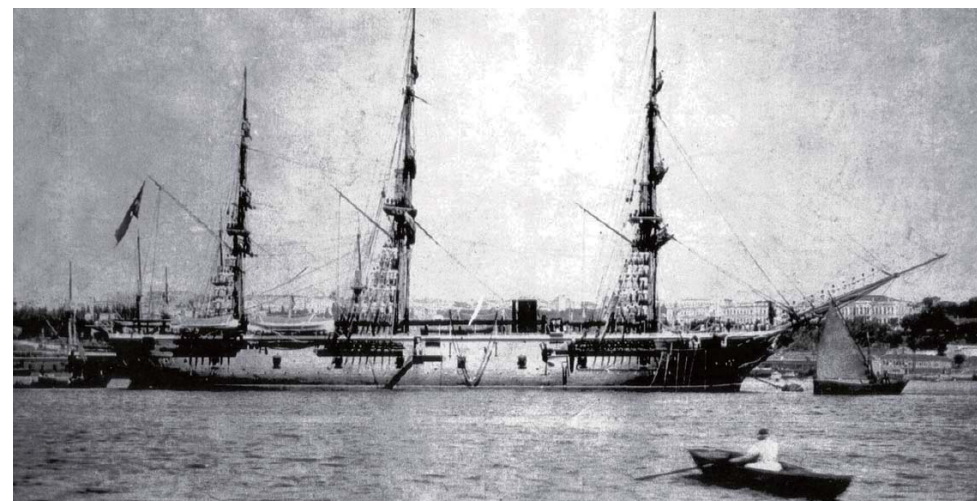
1890年6月7日、ついに目的地である横浜港に到着。当初6ヶ月の予定でしたが、このようなトラブルが続いたため、予定より5ヶ月も長い11ヶ月にもおよぶ航海となりました。

日本で使命を果たす

日本に到着したオスマン・パシヤ一行は、明治天皇に謁見。皇帝アブドゥルハミト2世より託された親書やトルコ最高勲章や種々の贈り物を天皇に捧呈し、併せて両国の修好という皇帝の意を天皇に伝えました。

11ヶ月にもおよぶ長い航海を経て、ようやく大任を果たすことができたのです。

その後一行は、日本で約3ヶ月滞在し、帰国することとなります。



イスタンブールに停泊中のエルトゥールル号。

エルトゥールル号の歴史

親善使節団を乗せて遠路、日本まで航海したエルトゥールル号。
日本トルコ友好の礎となったエルトゥールル号とは――

トルコ軍艦エルトゥールル号 主要諸元	
艦種	木造フリゲート
全長	79.2m（船首飾～船尾端）
	76.2m（垂線間長）
艦幅	15.1m
深さ	7.1m
大きさ	2,334 トン
速力	10 ノット（時速 18.52 km）

エルトゥールル号と日本への親善使節団

トルコ軍艦エルトゥールル号は、イスタンブールにあるタシユクザク造船所で建造された木造フリゲート艦です。

19世紀末、オスマン・トルコ帝国はヨーロッパ列強との不平等条約に苦しんでおり、皇帝アブドゥルハミト2世は、明治維新後同様の立場にあった日本との平等条約締結の促進と、1887年の小松宮彰仁親王殿下・同妃殿下一行のトルコ訪問に

する返礼などの目的で、日本への親善使節団の派遣を計画。

親善使節団の特使にオスマン・パシヤ（派遣時点は大佐で日本への航海中に提督「パシヤ」となり、オスマン・パシヤと呼ばれた）、艦長にはアリ・ベイが任命されました。

使節団の座乗艦として、エルトゥールル号が選出されましたが、建造されてから、すでに20年以上経過していたことから、老朽艦となっていました。

そのため、日本までの長く厳しい航海に耐えることができるのかという疑問もありました。



右／親善使節団の特使オスマン・パシヤ。
上／アリ・ベイ艦長。



右／神戸の病院で手当を受けたエルトゥール号の生存者。上／生存者をトルコまで送り届けた軍艦「金剛」。



不眠不休の救助活動

エルトゥール号の事故を知った大島の島民は、不眠不休で献身的な救助活動を行いました。40メートル近い崖を下り、体の大きなトルコ人を救出するため、1人が負傷者を背負い、別の人が後ろから押し、さらに崖の上から縄で引き上げる。トルコ人1人を助けるために3人がかりで救出を行ったと言われています。救出された負傷者の冷えた体を温めるなど、1人でも多くの命を救うため、懸命な活動が行われました。

Pick up

事故当時の様子を克明に記録

沖周大島村長の日記



事故当時、大島村の村長であった沖周氏はエルトゥール号事件の詳細を「土耳其軍艦エルトゥール号難事取扱二係ル日記」として、残しています。

この日記は、当時の貴重な資料としてトルコ記念館に保管されています。



そして、大島の島民は、言葉も通じないトルコ人に、衣類をはじめ、芋や貴重なタンパク源である卵を産む鶏も食料として、惜しげもなく提供しています。島民の介護のおかげで、徐々に体力を回復した生存者は、神戸の病院に移送され、手当を受けた後、日本の軍艦「比叡」と「金剛」によって、無事祖国であるトルコに送り届けられました。

その後、他村の協力も得て、事故で亡くなった方の収容と埋葬も行われており、事故の翌年には、最初の慰霊碑が檜野崎に建てられています。

Interview

救援者の子孫に聞く事故当時の様子



はまの 三功 さん

エルトゥール号の海難事故が起こったのは、私の祖父が11歳の時でした。

当時、檜野には60戸くらいの家があり、全員が救出に携わったとのこと。陸から捜索を行う者、素潜りで遺体の引き上げを行う者など、

役割を決め救助活動が行われました。

過酷な状況だったと思いますが、「つらかった、苦しかった」ということは聞いていません。生存者が帰国の途に就いた後は「みんな無事にトルコに帰れたのか」と心配する話ばかりだったとのこと。



エルトゥール号遭難現場。写真中央の奥に見える岩が船甲羅。

エルトゥール号の悲劇

帰国の途についたエルトゥール号を待ち受ける悲しい運命——
紀伊大島沖で台風に遭遇、舵の自由を奪われ、岩礁に激突し沈没。
事故を知った島民により懸命な救助活動が行われた。

嵐の海へ

1890年9月15日、使節団一行は横浜港を出港、帰国の途につきました。

日本国側は、9月が台風の子節であり、エルトゥール号が建造後20年以上を経た木造船であることから、出発の延期を勧めました。

しかし、当時日本ではコレラが発生しており、エルトゥール号の乗組員にも蔓延。10余名が亡くなり、検疫のため、長期間足止めを食ったことからオスマン・パシャは、これ以上帰途が遅れないようにと、同日横浜港を出港し神戸を目指しました。

エルトゥール号の遭難

横浜を出港して、翌日の9月16日午後9時頃、エルトゥール号は串本町大島檜野崎沖を航行中、台風に遭遇。船は猛烈な波浪と強風により、瞬く間に自由を失い、次第に檜野崎に寄せられ、船甲羅岩礁に激突したのです。

船体破損部から流入した海水が機関に入り、水蒸気爆発を引き起こし、船は大破。乗組員は海に吹き飛ばされ、爆発による火傷や荒れ狂う海で

溺れるなど、オスマン・パシャ以下580余名が殉職、生存者はわずかに69名という未曾有の海難事故となりました。

現場周辺に居合わせた高野友吉氏は、自力で断崖を這いあがってきた生存者と遭遇。事故を知り、すぐに集落に戻り、区民に伝えていきます。

檜野崎灯台にも生存者が助けを求めて集まっていたが、言葉が通じません。そこで、各国の国旗が掲載されている資料を示したところ、トルコ国旗を指したので、負傷者がトルコ人であることが判明しました。



上／第一発見者の高野友吉氏。右／当時の檜野崎灯台。

トルコ共和国の恩返し

エルトゥールル号遭難事故から95年後の1985年。
イラン・イラク戦争の中、日本人の危機をトルコ共和国が救助。
自国民より日本人を優先して助けてくれた理由とは――

恐怖の声明

1985年3月17日、イラクのフセイン大統領が「48時間の猶予期限以降、イラン上空を飛ぶ航空機は民間機であっても無差別に攻撃する。」との声明を発表しました。

イラン在住の外国人は命の危険を感じ、一斉に出国。当時、イランに在住していた日本人も出国を試みましたが、各国の航空会社は自国民を優先して搭乗させていたため、なかなか飛行機に乗れず、多くの日本人がイランを出国できない状況となっていました。

救援機の要請もされましたが、乗務員の安全が確保できないとの理由から、見送られ、刻々とタイムリミットが迫るなか、日本人は、脱出する方法がなく、途方に暮れていました。

エルトゥールル号の恩返し

そんな時、救いの手を差し伸べてくれたのがトルコ共和国です。

タイムリミットが迫る3月19日、トルコ共和国から救援機が来ると知った日本人は、「どうしてトルコが」という気持ちを抱きながらテヘランのメヘラバード空港に移動。トルコから駆けつけた救援機により、無事出国できたのです。

当時、テヘランには多くのトルコ人も在住していましたが、航空機を日本人に提供し、陸路で避難をしてくれていました。

なぜ、日本人のためにそこまでしてくれたのか、わからずにいたところ、トルコ側から「私たちはエルトゥールル号の借りを返しただけです。」とのコメントが発表されました。

串本の皆さんのおかげで、私は命を救われました。

1985年2月24日から、私は仕事の関係でテヘランにいました。

3月に入ると情勢が一気に悪化。12日には、日本人が多く住んでいた場所が空爆され、イランを脱出しなければならぬと感じました。

航空機で脱出を試みましたが、各国の航空機は自国民が優先され、一機につき、数名ずつくらいしか日本人は乗れません。

3月17日には、フセイン大統領が「19日の午後8時以降、イランの上

空を飛ぶ飛行機は全て、攻撃する」と宣言。さらに、日本からの救援機も来ないという状況で、イランを脱出することはできないと思いました。

そんな時、日本大使館からトルコ航空の救援機が来ることが知らされ、飛び上がって喜びました。これが19日の早朝です。

当時、エルトゥールル号事件の事を知らなかった私は、なぜトルコが助けに来てくれるのかわかりませんでしたが、空港に到着し、搭乗券を

日本人を助けられたことは私の誇り。

危険をかえりみず、テヘランの日本人を救出

トルコ航空の元機長

故 オルハン・スヨルジュ さん

(2011年3月27日、当町訪問時のコメント)

日本に対する親近感は当時から抱いており、日本人を助けに行った全員がエルトゥールル号の史実を知っていました。

テヘランでは、取り残された日本人全員を助けられたことを誇りに思うし、エルトゥールル号事件の際、お世話になった日本人に恩返しことができました。



スヨルジュさんは生前、串本を訪問され、エルトゥールル号遭難慰霊碑で行われた献花式典に参加されました。

2014年3月には、故人を追悼する「友好の灯火」が同慰霊碑で行われました。



トルコ航空機により救出された
沼田 準一 さん

もらったときは、生きて帰れるという思いがあふれました。

全員が乗り終えると、飛行機はすぐに離陸しましたが、「飛行機そのものを爆撃される可能性はある。」という気持ちがありましたので、機内アナウンスでトルコに入ったことが告げられた時は、本当に安堵しました。

2010年、当時私たちを助けてくれた方々にお会いし、当時のキャビンアテンダントさんに「いつ撃墜されるかわからない飛行機でよく助けにきてくださいました。」と声をかけました。すると「昔、トルコ人が日本人に助けられました。だから、私たちは日本人を助けるために、この仕事に携われたことを誇りに思います。」と言ってくれました。

エルトゥールル号事件の時、紀伊大島の方が命がけでトルコの人を助けたこと。そして、慰霊碑の清掃などをずっと続けてくれたおかげで私は命を救われました。



①日本人を救出したトルコ空港のDC10型機。テヘランに残された日本人を救出するため、トルコから派遣されました。(写真提供 Turkish Airlines) ②大島小学校で自身の体験を児童に伝える沼田さん。2014年には、串本ふるさと大使に就任され、串本町の宣伝もしています。

(C) 2015 Ertugrul Film Partners



荒船海岸ロケ地

(串本町田原)

海岸の一部分に明治時代の樫野集落を見事に再現したセットが建てられました。



阿野木展望台ロケ地

(串本町樫野)

展望台のあった場所に、本物としか思えない岩の見晴らし台が制作されました。



阿野木漁港口ロケ地

(串本町樫野)

漁港の一角に、明治時代、大島にあった遊郭のオープンセットが建てられました。



荒船海岸で映画撮影に臨むキャストの方々。右から忽那汐里さん。内野聖陽さん。ケナン・エジェさん。田中光敏監督。

史実を後世に語り継ぐ

1通の手紙から始まった映画化に向けた取り組み。
2つの史実をもとにした映画製作は、やがて、
日本トルコ合作という国家級のプロジェクトとなる――

映画化までの道のり

エルトゥール号とテヘランの日
本人救出を題材にした壮大な映画プロ
ジェクトは、10年前に田嶋町長から
大学時代の旧友である田中光敏監督
に出された1通の手紙から始ま
ります。

2009年には、田中監督が串本
へ視察に訪れ、エルトゥール号の
史実を詳しく知り、映画化に向けて
の構想が練られました。
翌年の日本トルコ友好120周年
事業の際に、関係者に企画書を配り、
協力を募りました。同年、トルコの
文化観光大臣の賛同を得たことで、
映画製作は大きく動き出したのです。
2014年には、安倍首相とエル
ドアン大統領の後押しがあり、国家

級のプロジェクト規模に膨らみます。
多くの関係者の支援と協力により、
映画『海難1890』は2014年
12月14日にランタイン。日本とト
ルコでの撮影を経て、2015年12
月5日、全国公開となります。

串本のオープンセット

映画『海難1890』でのエル
トゥール号遭難事故に関する撮影
は串本町でも行われました。
撮影は、荒船海岸、阿野木漁港、
阿野木展望台、袋港周辺海岸の4ヶ
所で実施。
11ページでは、町内に建てられた
オープンセットについて、建てる前
と建てる後の対比させながらご紹介
します。

Interview

エキストラとして映画撮影に参加して



撮影に参加できて
本当に嬉しかった

おくむら ふみこ
奥村 文子 さん

撮影場所（荒船海岸）は子どもの頃、住んでいた所で、セットが建てられた浜辺もよく遊んでいました。あの土地には、すごく思い出があったので、ぜひエキストラに参加したかったんです。

撮影に関わった方、全員が一生懸命で本当に感動しましたし、スタッフの方にもいろいろと気を遣ってもらいましたね。

映画を製作する大変さを肌で感じました。

映画が公開されたら、たくさんの人に観てもらってヒットして欲しいし、トルコとの友好関係もさらに広まってくれば嬉しいです。



多くの人にこの史
実を知ってほしい

ごとう あきひろ
後藤 明洋 さん

真冬での撮影で、衣装も薄く、外で待つことが長かったため、本当に寒かったのですが、面白い経験をさせてもらいました。

荒船海岸での撮影のとき、セットに使用されていた魚を仕分けする道具を子どもの頃、漁港などで見た記憶があり、懐かしく感じましたね。

串本の史実が描かれている作品なので、映画が公開されたら必ず観に行きます。

イラン・イラク戦争の日本人救出の背景には、この串本で起こったエルトゥールル号事件があったことを多くの人に知ってもらいたいですね。

映画で串本が有名
になってほしい

まつした しゅうや
松下 修也 さん



事前に寒いと聞いて、ある程度は覚悟していましたが、想像以上の寒さでした。待ち時間もありませんでしたが、その間に撮影風景も見ることができ、現場にいないとわからないことも知ることができたので、参加して本当に良かったです。

映画が公開され、この串本でこんなにすごい史実があったんだということを多くの人に知ってほしいと思っています。

そして、映画を観た人が串本に来てくれることを期待しています。串本が有名になり、串本に行きたいという人が増えてくれれば嬉しいです。

普段経験できない
貴重な体験でした

たに ななえ
谷 奈苗 さん



地元で行われる撮影で、なかなか経験できないことなので、エキストラに応募しました。

メイクや着付けをしっかりとしてもらい、現場に向かいました。応募した時は、隅の方で立っているくらいだと思っていましたが、動作などいろいろと指示があったので、びっくりしましたね。

撮影も間近で見ることが出来たし、本当に楽しかったです。映画で自分が参加したシーンがきたらつい探してしまいそうです。

この映画で多くの人に日本とトルコの友好の話を知ってもらえたらと思っています。



①ロケ地となった荒船海岸の清掃を行う映画支援団体とボランティアの方々。②
③樫野崎と荒船の両ロケ地で行われた炊き出しの様子。

温かい支援

映画『海難1890』の撮影が串本でも実施されることが決定すると、映画支援団体やボランティアによる撮影現場の清掃などが行われました。1890年の明治時代という設定であるため、その時代には存在しないプラスチックなどを撮影現場からすべて撤去していただきました。撮影期間中には、町内の女性団体や有志の方々による炊き出しも2回行われ、提供されたあたたかい料理は、寒空の中、映画の撮影に精を出す関係者の方々に好評でした。また、エキストラとして多くの方々に協力していただきました。13ページでは、エキストラに参加された方のお話を紹介します。

Interview

映画支援団体としての活動

映画『海難1890』を地元から支援するために設立されたのが「映画製作準備委員会」と「くしもとフィルムサポーターズ」です。

映画化が決まった時は、地元が映画の舞台になるということで、本当に嬉しかったですね。

串本のロケ地が決定してからは、ロケ地の清掃やセットに必要な流木

などの資材調達、エキストラの募集を行い、撮影がスムーズに進むように務めました。エキストラには町内外から延べ190人が参加し、撮影に協力していただきました。

この映画は全国で公開されるので、多くの方に観ていただき、舞台となった串本にもぜひ来てもらいたいですね。



多くの協力を得た映画撮影

2015年1月初旬から2月中旬にかけて、串本町で行われた映画撮影。ロケ地の清掃や炊き出しなど、多くの方々の協力により撮影が進められた。



映画製作準備委員会、くしもとフィルムサポーターズ
しもの やすし
代表 島野 靖 さん

この友好を永遠に

「絆」という言葉の意味と
映画に込められた想い

「絆」とは、大変素晴らしい言葉です。しかし、実際の「絆」は、簡単に結ばれるものではありません。時間をかけ、相手を思う心がある、初めて強い「絆」が生まれると思っています。

125年前にエルトゥール号の遭難事故が起りましたが、それを語り継がなければ、話はそこで終わってしまいます。歴史は語り継がなければ消えてしまうのです。

事故が起こり、その後も、地域の方々が慰霊碑の清掃を続け、行政も定期的な追悼式典の開催や献花を欠かさず行ってきたことお互いの信頼関係が構築されていき、それが強い「絆」を生んだのです。

トルコの方々が串本を訪れ、エルトゥール号の慰霊碑に立ち寄った際、慰霊碑が綺麗に保たれている

ことを本当に感謝してくれま

す。遠い異国の地で無念にも命を落とされた殉難将

士を弔う私たちの気持ちは、トルコの方々にも伝わり、さらなる友好関係へと繋がっています。

この友好関係は、やがて日本とトルコ、両国を動かす友好関係にまで発展していきます。

今回、製作された日本トルコ合作映画『海難1890』。この映画でも日本トルコ両政府の協力をいただいています。

この映画を製作するきっかけとなったのが、13年前に無量寺で発見された1通の手紙です。

この手紙は、エルトゥール号事故の際、負傷者の治療にあたった医師が治療費の清算を求められた時に



串本町長 田嶋 勝正

送り返した文章の控えでした。そこには、施術料を遭難者に寄付する旨の内容が書かれており、先人の行動に本当に感銘を受けました。どうすればこの史実を多くの人に知ってもらい、後世に伝えていくことができるかを考え、至った答えが映画でした。その後、大学の旧友だった田中光敏監督に手紙を出し映画化への取り組みが開始されたのです。

この映画は、世界に誇れる日本の「史実」や「真実」を後世に語り継ぐための1つの手段です。1人でも多くの方に観ていただき、日本とトルコの友好について知っていただきたいと思っています。

▶ Pick up

映画製作のきっかけとなった貴重な資料

治療を行った医師の手紙

医師が薬代や治療費を清算するよう求めた政府に対して返答した手紙の内容（要約）。

「初めから薬価施術料を請求するつもりはなく、ただ負傷者の痛ましい様子を見て、助けたい一心で行ったのであり、費用は遭難者へ寄付いたします。」



受け継がれる思い

エルトゥール号の事故から125年。

現在も樫野区の方々と大島小・中学校の児童、生徒は慰霊碑の清掃を行い、追悼歌を捧げるなど、殉難将士の御霊を弔っています。

125年という長い間、受け継がれてきた思いを私たちはこれからも絶やすことなく、次の世代へと繋いでいかなければなりません。串本とトルコの友好が永遠に続くように――

